

なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」 だったのか

橋 本 裕 之

1 共同研究の目的

国立歴史民俗博物館の共同研究「民俗誌の記述についての基礎的研究」（研究代表者／橋本裕之）は民俗学の知的可能性を追求するための、いわば前哨戦として1989年度から1991年度にかけて3カ年計画で実施されたものであり、1992年3月に無事終了した。本書はその研究成果をまとめた2冊めの報告書であり、同時に最終的な報告書の性格を託されている。1冊めの報告書は「共同研究「民俗誌の記述についての基礎的研究」中間報告」という表題を持ち、1991年3月に『国立歴史民俗博物館研究報告』第34集として発行されているので、あわせて参照していただければ幸いである。

本共同研究の基本的な構想と背景的な事情は1冊めの冒頭、「なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」なのか」と題した小文でくわしく紹介したところである。⁽¹⁾実施期間中に書かれたものであるせいか、いくらか上気した文体には気恥ずかしい箇所も少なからず含まれている。しかしながら、幸いにも構想じたい重大な改変をせまられる事態は発生しなかったため、今日でも十分読みうるものであると思われる。したがって、ここでは重複する危険を避け、むしろ当初の研究目的を公表しておきたい。共同研究計画書に記入したものであるため、今日では一部に訂正したい表現もみうけられるが、本共同研究の目的を最もよくしめしたものとして、やはり一定の価値を失っていないはずである。

これまで民俗学は、現地調査を唯一ともいえる有力な技法として、研究対象としての民俗を認識し記述することによって成立してきたが、調査や記述という行為の存立基盤については、ほとんど顧みられることがなかった。最近における民俗の著しい変化にともなって、都市民俗学や比較民俗学など、新しい方法論や研究分野が開拓されてきたとはいえ、調査や記述という行為をめぐる諸問題と、それを規定している諸要因を批判的に検討するまでには至っていないのが現状である。そのため眼前に生起しつつある民俗事象を把握する試みとしては、これらは必ずしも有効なものとなり得ていない。／そこで本共同研究は、民俗学において大きな比重を占める民俗誌に注目して、調査と記述の問題を主たる手がかりとしながら、従来等閑視されてきた民俗誌の記述、さらには民俗学そのものを成り立たせている存立基盤をい

くつかの側面から明らかにし、近代に成立した民俗学の知的可能性を追求することを目指すものである。そのうえで、民俗学が内包する理論的な諸問題に対する調査研究に向けての基礎的研究を試みたい。

こうした研究目的を効果的に実現させるため、内外の関係者数名が事前に何度か談合する機会を持ち、研究組織や研究計画・研究方法をもくわしく検討して、本共同研究を組織的に構成するよう心がけた。その結果として、本共同研究はいくつかの特徴的な性格を獲得していったのである。以下、その内容を紹介していきたい。

2 共同研究の組織

本共同研究は民俗学の存立基盤を主題化する試みを徹底させるため、共同研究員を必ずしもいわゆる民俗学者に限定しなかった。いわゆる民俗学者は多くのばあい、民俗学の存立基盤をあまりにも自明な何ものかとして、いわば非一思考の領域に封じこめてきたように感じられたからである。したがって民俗学の内外を問わず、むしろ関連する諸領域を重視して、民俗学の存立基盤を問いなおす契機たりうるめざましい成果をあげてきた研究者にひろく参加していただいたのであった(所属は1993年9月現在)。

岩本由輝(東北学院大学経済学部, 1993年3月まで国立歴史民俗博物館民俗研究部客員/日本経済史)

鶴飼正樹(社会学)

大月隆寛(東京外国語大学外国語学部/民俗学)

小川徹太郎(民俗学)

蔵持不三也(早稲田大学人間科学部/文化人類学)

佐藤健二(法政大学社会学部/社会学)

関一敏(筑波大学歴史・人類学系/宗教学)

福島真人(国際大学グローバル・コミュニケーション・センター, 1993年3月まで東京大学東洋文化研究所/文化人類学)

藤井隆至(新潟大学経済学部/経済学)

山折哲雄(国際日本文化研究センター/宗教学)

上野和男(国立歴史民俗博物館民俗研究部/社会人類学)

小林忠雄(国立歴史民俗博物館民俗研究部/民俗学)

橋本裕之(国立歴史民俗博物館民俗研究部/演劇学)

本共同研究に参加したのは以上の13名であった。このうち岩本氏と小林氏は新規着任のため1990年度から、福島氏は在外研究のため1990年度まで参加した。研究組織の持つ特徴として、もうひとつだけ付言しておきたい。本共同研究はその中心的な存在として、比較的若い研究者に参

加していただいた。やはり民俗学の存立基盤を主題化する試みを徹底させるためであったが、その結果として従来の共同研究に欠けてしまいがちであった清新かつ活発な雰囲気最後まで持続する幸運にも恵まれたのであった。とりわけ本共同研究の速度を文字に定着させるべく期間中に刊行した中間報告は、こうした雰囲気がもたらした最も大きな成果であったように思われる。

3 共同研究の実際

本共同研究は前掲した研究目的を効果的に実現させるため、ぜひともとりくまなければならない主要な課題として、3つのサブ・テーマを設定した。すなわち、初年度の「民俗学的思考の系譜」、2年度の「調査をめぐる諸問題」、3年度の「記述をめぐる諸問題」である。こうしたサブ・テーマは相互規定的な関係におかれており、あくまでも便宜的に設定したものにすぎなかったが、研究計画・研究方法を組織的に構成するさいに少なからず貢献した。その付置連関はくわしく後述するところであるのでしばらく措き、まずもって共同研究の実際を回顧してみたい。

[1989年度／民俗学的思考の系譜]

第1回研究会（1989年7月1日 国立歴史民俗博物館）

- 橋本裕之 報告「今後の計画と展望①」
大月隆寛 報告「今後の計画と展望②」
参加者全員 報告「共同研究に期待するもの」

第2回研究会（1989年7月21・22日 国立歴史民俗博物館）

- 佐藤健二 研究発表「民俗学史の視点と民俗誌について—「学史」（＝学の歴史）の記述に焦点をあてて—」
（コメンテーター 山折哲雄）
大月隆寛 研究発表「病草紙—日本民俗学における病理の現在—」
（コメンテーター 関一敏）
橋本裕之 研究発表「文化としての民俗芸能研究」
（コメンテーター 上野和男）

第3回研究会（1989年10月1・2日 駒沢大学+早稲田奉仕園）

- 参加者全員 現地調査「日本民俗学会年会への参加および見学」
関一敏 研究発表「しあわせの民俗誌—いわゆる「現代科学」について—」
（コメンテーター 大月隆寛）

第4回研究会（1989年12月24・25日 相馬市労働福祉会館）

- 鵜飼正樹 研究発表「民俗誌はどう読まれているか—『甲賀袖中の民俗』の例—」
（コメンテーター 小川徹太郎）
岩崎敏夫氏 特別講演「初期の日本民俗学と私」

岩本由輝 研究発表『『遠野物語』をめぐる』

(コメンテーター 菊地照雄)

第5回研究会(1990年2月2・3日 別所温泉ホテルたけや)

岩本通弥 研究発表「民俗学と情動(感情)研究」

(コメンテーター 佐藤健二)

箱山貴太郎氏 特別講演「ぼくが民俗学者になったわけ」

橋本裕之 報告「初年度を終えるにあたって」

[1990年度/調査をめぐる諸問題]

第1回研究会(1990年5月9日 国立歴史民俗博物館)

山折哲雄 研究発表「廃墟の中の民俗—柳田・折口の見たもの—」

(コメンテーター 関一敏)

福島真人 研究発表「正しい民族誌の書き方—正当派社会人類学の逆襲—」

(コメンテーター 橋本裕之)

第2回研究会(1990年6月2・3日 郡山市立中央公民館)

藤井隆至 研究発表「農業政策から郷土研究へ—柳田国男における思索の展開過程—」

(コメンテーター 岩本由輝)

竹内利美氏 特別講演「昭和初期の地方研究の動向」

参加者全員 現地調査「福島県民俗学会意見発表会への参加および見学」

第3回研究会(1990年9月15日 国立歴史民俗博物館)

上野誠 研究発表「折口信夫のフィールドワーク—古典と「生活の古典」を結ぶもの—」

(コメンテーター 福島真人)

小池淳一 研究発表「折口民俗学の可能性—『古代研究』前後を中心として—」

(コメンテーター 山折哲雄)

第4回研究会(1991年1月9日 国際日本文化研究センター)

大月隆寛 報告「平山先生のこと」

平山敏治郎氏 特別講演「わたしと民俗学」

[1991年度/記述をめぐる諸問題]

第1回研究会(1991年5月25日 国立歴史民俗博物館)

関一敏 研究発表「神を記述する方法—しあわせの民俗誌(2)—」

(コメンテーター 山折哲雄)

蔵持不三也 研究発表「神々の黄昏もしくは黄昏てゆくものへのオード—資料と記述を巡って—」

(コメンテーター 大月隆寛)

第2回研究会（1991年6月8日 京大会館）

小川徹太郎 研究発表「民俗誌の記述をめぐって—調査を反省しながら—」
（コメンテーター 鵜飼正樹）

石塚尊俊氏 特別講演「神道と民俗学」

第3回研究会（1991年8月2日 国立歴史民俗博物館）

上野和男 研究発表「民俗誌と民俗調査」
（コメンテーター 佐藤健二）

小林忠雄 研究発表「都市民俗にゆきつくまで」
（コメンテーター 鵜飼正樹）

第4回研究会（1992年3月7・8日 国立歴史民俗博物館+成城区民集会所）

佐藤健二 研究発表「民俗調査の誕生」
（コメンテーター 鵜飼正樹）

大月隆寛 研究発表「民俗誌とルポルタージュ」
（コメンテーター 関一敏）

橋本裕之 報告「共同研究「民俗誌の記述についての基礎的研究」の総括」

柳田為正氏 特別講演「せがれのみた柳田国男」

以上、本共同研究はおもに研究会の形式を採用した。参加者が各自の研究発表をおこない、順次コメンテーターを担当したのち、参加者全員で討議をおこなったのである。数名のゲスト・スピーカーおよびオブザーバーにも適宜参加していただいた。参加者の負担は正直な話けっして少なくなかったが、本共同研究の目的を実現するためにも、そして各自の主題を深めるためにも、有益な機会を提供したはずである。じっさい、白熱した討議はいつも長時間にわたった。

また、本共同研究は初年度のサブ・テーマでもあった「民俗学的思考の系譜」を解明するための実証的な調査研究として、民俗学にかかわってきた先駆者を訪問する試みを3カ年続けてきた。その結果として、岩崎敏夫氏・箱山貴太郎氏・竹内利美氏・平山敏治郎氏・石塚尊俊氏・柳田為正氏の諸先学に特別講演、といっても気楽な座談の形式をとりながら話していただけたのである。こうした試みはさまざまな民俗誌の実践を生み出してきた初期の民俗学にそなわっていた雰囲気、そして初期の民俗学をとりまいていた時代的かつ社会的状況に少しでも接近する目的に沿って構想したものであり、民俗学の知的可能性を追求する本共同研究にとって必要不可欠なものであった。中間報告の冒頭にはこう書きつけられている。

ここで正直に告白しておかなければならない。「書きことば」だけではもはや汲みとることができなくなってしまったころの話題を「話しことば」で伝えていただき、初期の民俗学にみなぎっていた雰囲気に耳を傾けようとする本共同研究の試みは、民俗学そのものに対する現地調査の意味あいも含まれていた。初期の民俗学にやどった知性とは、いったいどのような状況のなかで生まれてきたのだろうか。民俗誌の記述にそくしながらこの問いを掘りさげ

ることは、そのまま民俗学という学問の存立基盤を明らかにする試みにつながってゆくにち
(2)
がいない。

本共同研究はこうした目的を持ちながら、文字どおり民俗学じたいに対する現地調査をも敢行したのであったが、やはり6名の方々をお願いして実現した対話を凌駕するものではなかった。手前勝手な依頼であったにもかかわらずご快諾いただき、長時間にわたって話してくださった6名の方々に対して、あらためて深く謝意を表したい。しかしながら、初年度に登場していただいた箱山氏は1992年10月8日、86歳の天寿を全うされた。誠実なお人柄をしのびながら、この機会を借りて氏のご冥福をお祈りしたい。まさしく民俗学に賭けた稀有な生涯であった。⁽³⁾

4 共同研究の成果

本共同研究が民俗誌に注目したのは、学問論と調査論が会おうところに成立する形式として民俗学にまつわる広汎な関心を喚起する可能性を持っているように思われたからであった。その含意するところを3つのサブ・テーマが描き出す付置連関にそくしながらしめしておけば、大略以下のとおりである。初年度に「民俗学的思考の系譜」を学史的に検討して、あまりにも自明な領域として等閑視されてきた民俗学の存立基盤を主題化した。民俗学の知的可能性を追求したい本共同研究にしても、やはりこうした認識論的前提を共有するところからはじめなければならなかったのである。中間報告を初年度のサブ・テーマ「民俗学的思考の系譜」に沿って構成したのも、まさしくそのためであった。

2年度および3年度には初年度の成果を継承しながら、民俗学的思考の生産現場である調査という行為を批判的に検討、そこから得られる知識をまとめあげて民俗誌としてたちあがらせる記述という行為をも批判的に検討した。その結果として、本共同研究は民俗学の存立基盤を複数の角度から浮かびあがらせる試みにいささかなりとも成功しているのではないだろうか。しかも、こうした試みは方法論をひとつの領域に封じこめてしまうよりも、むしろ調査や記述に規定されるものとして問いなおす視座を呼びおこす。すなわち、具体的かつ中間的な性格を持つ民俗誌に注目するところから、方法論をも一部の研究者から奪還して、民俗学にまつわる広汎な関心の対象として解放していけるものと思われたのである。

しかしながら、調査と記述はそもそも相互規定的な関係におかれており、したがってこうした試みも重層的な構造を持つ。その重層的な構造じたい民俗学という学問の存立基盤を最もよくしめすものであったようにも感じられるのだが、はたしていかがなものであろうか。いずれにしても、その成果は中間報告および本書がよくしめすところであるので、もはや贅言をかさねるべくもない。若干のばらつきがないわけでもないが、ともかく個々の論考を参照していただければ幸いである。

本書は当初の構想をできるだけ忠実に反映するため、3部構成を採用している。第1部は「調

査をめぐる諸問題」、第2部は「記述をめぐる諸問題」、第3部は特別講演を文字化した「記録」にあてた。第1部と第2部は参加者のほぼ全員が研究発表を直接的もしくは間接的に発展させながら執筆した論考からなる。両者はやはりあくまでも相互規定的な関係におかれており、表裏一体の性格を持ちながら全体を構成している。第3部は中間報告に掲載した岩崎・箱山両氏の記録を除いた、4名の方々の特別講演を文字化した記録からなる。こうした構成を持つ本書は中間報告ともあわせて、本共同研究の構想をよく体现しているはずである。

記録の原型である特別講演にそくして、いくつか補足しておきたい。竹内氏の特別講演は1990年6月3日に郡山市民中央会館でおこなわれたもの、平山氏の特別講演は1991年1月9日に国際日本文化研究センターでおこなわれたもの、石塚氏の特別講演は1991年6月8日に京大会館でおこなわれたもの、そして本共同研究の最後を飾っていただいた柳田為正氏の特別講演は1992年3月8日に成城区民集会所でおこなわれたものである。竹内氏の特別講演にさいしては和田文夫・鹿野政男の両氏をはじめ、福島県民俗学会の諸氏にご高配を賜った。柳田氏の特別講演にさいしては奥様の多大なご協力を賜り、記録にもみられるとお席上でもご発言を何度かいただいている。

ところで、特別講演を文字化する過程で、4名の方々にお願いしてカセットテープからおこした原稿に手を入れていただいた。きわめて煩雑な手続きであったにもかかわらず、ご好意におすがりする結果になってしまったわけである。また、諸般の事情で本書を刊行する手続きが遅れたため、お話しいただいた時期から当初まったく予想しなかった時間が経過してしまい、さまざまな不都合をも招来する仕儀にあいなった。4名の方々のご好意に十分報いなければならなかったところ、多大なご迷惑をおかけしてしまった一部始終を深くお詫びしたい。なお、平山・柳田両氏の特別講演に含まれている後半の座談は、基本的にご本人の発言を除いて氏名を特定しなかった。発言者はいうまでもなく複数であるが、ご本人の発言を強調したかったせいもあり、研究代表者の責任で個々の氏名を省略している。本共同研究が全体として質疑したもののみなしていただければ幸いである。

技術的な話題が続いてしまったので、最後に本共同研究にもかかわる今後の展望を書きつけておきたい。本共同研究が終了してからしばらく経過した今日、当初あまりみられなかった風潮がめだつようになってきた。それは民俗誌論の一世風靡とでも称するべき現象である。民俗誌を主題化する試みはいうまでもなく、今後も種々深められて然るべきものであった。もしかしたら本共同研究も先鞭をつけた榮譽に浴さなければならない責務を負っているのかもしれないが、いささか気がかりなところがないわけでもない。すなわち、民俗誌論じたい早くもひとつの領域として自閉しつつあるように感じられるのである。

民俗誌論は本来ならば、民俗誌的实践をはじめ個々の実践に再-反映されるべき性格を持つ。本共同研究もこうした可能性を模索するべく、民俗誌を学問論と調査論の出会いところとして定位、その具体的かつ中間的な性格に立脚しながら、民俗学にまつわる広汎な関心を喚起したいと考えたわけである。じっさい、民俗誌という形式はそのような目的にとっても、きわめて重要な

契機を提供していた。しかしながら、近年よくみられる民俗誌論は、しばしば調査や記述という行為に深く規定されてある民俗誌の本来の性格を剥離させてしまっており、むしろ従来の民俗誌論を祖上へのせて民俗誌の可能性や不可能性を論述する試みに熱心であるらしい。民俗誌論が新しい領域として、いわば「独り歩き」をはじめているのである。⁽⁴⁾

にもかかわらず、というべきだろうか。本共同研究はこうした風潮に対して、おそらく一線を画している。すなわち、民俗誌論に自閉する方向をめざしていなかったのである。それはあくまでも民俗学の知的可能性を追求するという迂遠な目的に沿ったものであり、中間報告および本書が収録した論考にしてもその一環を構成していた。したがって、本共同研究が近年の民俗誌論にみられない特徴的な性格を持っているとしたら、研究目的じたいにもそなっていた民俗学にまつわる広汎な関心に尽きるものと思われる。本書に序説や序論という文字を含む論考が期せずして集中したのも、各自がみずから設定した主題を民俗学にまつわる広汎な関心の対象として解放しており、個々の第一歩を記録していたからであった。再び中間報告の冒頭から引用しておきたい。

最後になったが、一言だけつけくわえておきたい。それは、本書にこめられたもうひとつの意図について、である。共同研究という形式にはさまざまな可能性が考えられて然るべきであるが、本共同研究はたがいに異質な思考が交錯する場として、もしくはさまざまな軌跡を描き出す運動として、そのありようを性格づけられている。したがって、本共同研究がとりかかっている試みは、性急にひとつの正解を求めるべきものでも、いずれひとつの結論に収斂してゆくものでもないように思う。⁽⁵⁾

本共同研究が終了した今日でも、こうした態度表明はまったく変わっていない。中間報告や本書のみならず、本共同研究の構想じたい民俗学の知的可能性を追求するための、まさしく第一歩を記録していたら幸いである。本共同研究は残念ながら、今後の展望を過不足なく描き出すところにたどりついていない。しかしながら、後続する試みを種々深めていったら、まったく新しい主題が少なからず浮かびあがるはずである。いつか態勢を再建して、あらためて着手してみたいと考えている。研究代表者が演劇学を専攻するいわば門外漢であり、しかも参加者のうち最年少であったため、不十分なところが多々あったかとも思う。最後になってしまったが、多大なご協力を賜った参加者に深く謝意を表したい。

註

- (1) 橋本裕之「なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」なのか」『国立歴史民俗博物館研究報告』第34集、国立歴史民俗博物館、1991年、参照。あわせて、同「新規共同研究の展望／民俗誌の記述についての基礎的研究」『歴博』第35号、国立歴史民俗博物館、1989年、をも参照されたい。
- (2) 同「なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」なのか」、4～5頁。
- (3) 同「ぼくが箱山さんに魅せられたわけ」『上田盆地』第32号、上田民俗研究会、1993年、参照。『上田盆地』第32号は箱山貴太郎氏に捧げる追悼文集の形式を採用しているので、その全体をも参照されたい。
- (4) 文化人類学の領域で一世を風靡した民族誌論も、近年もはやひとつの領域として自閉しつつあるように感じられる。民俗誌論にまつわる近年の風潮ともどこかしら響きあっており、やはり注意しておきたいところである。
- (5) 同「なぜ「民俗誌の記述についての基礎的研究」なのか」、8頁。

(国立歴史民俗博物館民俗研究部)